

国史跡月ノ木貝塚について

－立会調査報告と過去の調査成果－

濱 秀輝・西野 雅人・服部 智至

はじめに

国史跡月ノ木貝塚は、千葉市中央区仁戸名町289-1他に所在する。東西約150m、南北約200mの馬蹄形の貝層をもつ大型貝塚である。昭和52年に国の史跡に指定されており、市内に所在する5か所の国指定貝塚のなかでも、貝層が厚く、保存状態が良いことで知られている。

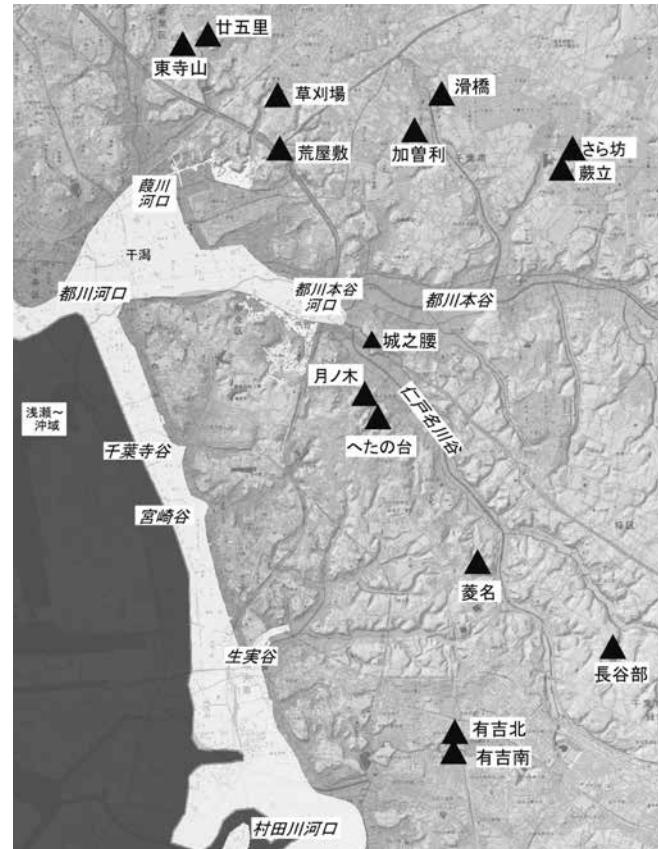
令和5年、史跡に隣接する民有地で宅地造成のため工事が行われた。過去の造成工事で既に削平された部分であるが、法面を工事する際に貝層が露出したため、工事立会の際に貝層の堆積状況を記録し、貝サンプルを採取したうえで、工事対象範囲の掘削と遺物の採集を行った。本稿はその報告であり、併せて過去の発掘調査の概要や出土遺物を取り上げる。月ノ木貝塚は史跡指定された著名な遺跡であるが、その実態を知りうる情報は乏しく、今後の研究と史跡の保護・活用に向けて、その重要性を確認しておきたい。

1 月ノ木貝塚とは

(1) 月ノ木貝塚の位置と周辺の遺跡

月ノ木貝塚は、都川水系の仁戸名川(支川都川)の谷を5km遡った標高25mの舌状台地の先端部に立地する。小さな谷を挟んだ南側にはほぼ同時期のへたの台貝塚が所在し、中期大型貝塚が双環状をなす。中期大型貝塚が最も集中する都川・村田川水系の中で都川・坂月川の貝塚群、村田川流域の貝塚群の中間に位置している。仁戸名川に面しているが、漁場としては、都川本谷の河口側と、東京湾から入る小さな谷である宮崎谷・千葉寺谷川の両方の漁場を利用しうる場所である。

仁戸名川谷に立地する貝塚集落はへたの台貝塚のほかに、河口部に中期の城之腰遺跡と後期の高崎台貝塚がある。谷奥には中期の菱名貝塚、長谷部貝塚、後期の台畠貝塚がある(第1図)。へたの台貝塚は、平成29年度に鉄塔建設、令和3・4年度に宅地開発に伴う発掘調査を実施しており、極めて良好な貝層や、チャート剥片の集積を伴う複数遺体埋葬などが見つかっている(小林2006)。



第1図 中期中葉の集落分布

(2) 発見から保存・整備の経緯

明治20年(1887)、上田英吉が「下総国千葉郡介墟記」(上田1887)のなかで、県内に所在する貝塚をはじめて紹介している。当時の千葉郡内の20数か所のなかにある「仁戸名」がへたの台貝塚と月ノ木貝塚である。「月ノ木貝塚」の名称が誌上にはじめてみられたのは、『日本石器時代人民遺物地名表』(東京帝国大学1897)で仁戸名村へタノダイ貝塚・ツキヌキ貝塚と記載されている。昭和26年(1951)には、千葉市史編纂を目的とした貝塚全体の地形測量と、貝塚北東部分約300m²の発掘調査が行われた。面状貝層や住居跡4軒を調査しており、当遺跡の重要性を伝える随一の情報源となっている。

昭和50年前後に土地所有者から住宅建設の問い合わせがあり、国・県・市での協議の結果、土地を買い上げて史跡整備を進める方針が固まり、昭和53年3月16日に国の史跡に指定された。現在は17,289.19m²が指定範囲となっている。それを遡る昭和46年から47年頃には、台地北東端を逆L字状に切り下げて宿泊施設が建設されたが、平成初期に更地にされ、荒地となつた。

平成3年には、今後の整備に向けてボーリングによる貝層の分布調査が行われ、南東側に開く馬蹄形貝塚の形状が測量図により示された。平成5年9月には住宅建設に伴う確認調査を実施したが開発には至つてない。この時に検出した貝層から貝サンプルを採取しており、平成28年に水洗・選別を終えているため、今回併せて報告する。サンプルから検出した土器は加曽利E II式主体である。現在は定期的に草刈りを行つており、平成20年には仁戸名月ノ木市民緑地の会を管理団体とする「仁戸名月の木市民緑地」が設置されたが、令和2年に廃止されている。令和5年の造成は、宿泊施設の跡地で行われたものである。工事は指定範囲には及んではいないが、景観を維持していた林の伐根が公有地に影響をもたらした。

発掘調査は昭和26年以降ほとんど行われず、この唯一の調査も概要報告のみである(武田1951・1953)。その後、遺跡に関する情報は追加されることはないなかつたが、千葉県史に所収されたほか(古内2000)、近年の千葉県による県内の縄文時代集落・貝塚の分布調査事業では、特に、重要な89遺跡に選定されている(千葉県教育委員会2021)。

2 昭和26年度の調査成果

(1) 調査概要

昭和26年(1951)の発掘調査は千葉市史編纂委員会のもと武田宗久氏らによって行われた。調査地点は貝塚北東部分約300m²である(第2図)。調査概報の性格を持つ『千葉市誌』の記載ほか(武田1951、1953)により概要を紹介する。月ノ木貝塚は、南北150m、東西115m、幅平均23mの規模を持ち、堤状貝塚と中央部の比高差3mを測る、北側に開口する馬蹄形貝塚である。中央部には一段

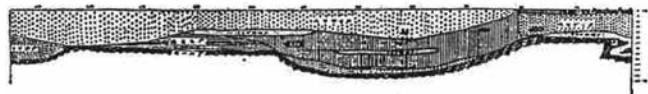
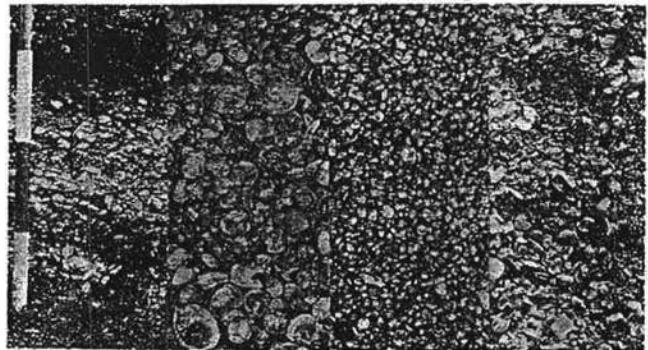


第2図 月ノ木貝塚昭和26年度測量図

下がった平坦面があり、武田はこれを「中凹地」と表現し、人工的に掘り下げた可能性を指摘している。中期大型貝塚では台地上に堤状の貝層を盛り上げるタイプはごく少なく、中央が窪む地形も稀である。貝層は120cm～140cmと厚く、保存状態は極めて良好である(第3図)。貝層の上部と下部はハマグリ・アサリ・シオフキ等の二枚貝主体の層をなし、中部はイボキサゴ及び破碎したキサゴ層からなる。その他貝類では、ウミニナ、マガキ、ツメタガイ、アカニシなど38種を、動物骨では、イノシシ、シカ、イヌ、クジラ、タイ、エイ、フグ、サメ、イカなどを検出している。

検出した遺構は、加曾利E II式期の竪穴住居跡4軒(1号～4号住居跡)、小竪穴1基である。このうち1・2号住居跡と小竪穴を完掘している。1号住居跡は、長軸6.66m、短軸4.68mの楕円形を呈し、確認面からの深さはほぼ1mを測る。概ね全体に壁溝が巡り、これとは別に南壁から約1mと1.4m内側で東壁と西壁を結ぶように2条の壁溝を検出している。このことにより少なくとも2回の反復拡張が行われていることが指摘されている。中央よりやや北側で炉を検出しているが、住居拡張に伴う炉の移動はみられない。拡張に伴うものを含め、主柱穴は約20基あり、深さは約0.5m～1mを測る。これに加え、壁溝に沿って壁柱穴が並ぶ。また、1号住居跡に接して、長軸1.76m、短軸1.64mの小竪穴を検出している。調査当時はこれを1号住居跡に付随する「小室」と判断しており、「この床面は、竪穴住居の床面と連続しているにもかかわらず、比較的軟くて、しかも1個の柱穴も周溝も存在せず、ただ1個の大型粗製土器が壁面にたてかけたごとくに発見された。」(武田1951:74-75)と記述されている。

2号住居跡は1号住居跡の南側に位置する。長軸5.77m、短軸4.7mの楕円形を呈し、確認面からの深さは平均0.4mを測る。西壁を中心に壁溝が巡り、中央よりやや北側で炉を検出している。主柱穴と思われるものが6基～8基あり、深さは約0.3m～0.8mを測る。西側で3号住居跡を切り、東側では4号住居跡により切られている。3号住居跡は全形のおよそ1/4を発掘し、炉、柱穴、壁溝の一部を検出している。



第3図 貝層写真と貝層断面図(千葉市誌 p 30 一部改変)



第4図 1号(奥)、2号(手前)住居跡調査状況



第5図 2号住居跡 完形土器、鯨骨出土状況

4号住居跡は、2号住居跡と重複する部分のみを床面まで掘り下げ、柱穴、多量の灰、焼土、柱状木炭等を検出している。記載内容から焼失住居の可能性も考えられる。

概ね上記の内容が、過去の調査記録から判明した発掘成果の内容である。これらに加え、千葉市埋蔵文化財調査センター保管の県立千葉高校旧蔵及び加曽利貝塚博物館所蔵の武田宗久資料の遺物や写真から得られた新たな知見を若干付け加えておきたい。

第4図は住居跡の完掘写真である。写真奥(北)に1号住居跡があり、手前(南)に2号住居跡、2号住居跡の西側に3号住居跡、東側に4号住居跡を確認できる。武田(1953)はいずれの住居跡も加曽利E II式期に比定しているが、2号住居跡出土の完形の深鉢(第5図)は加曽利E I式期のものである。令和5年の立会調査の出土資料も、加曽利E II式期の古段階から中段階の土器が大半を占めていたが、加曽利E I式期古段階からE I～E II式期の土器も含まれていた。調査はごく一部の範囲に限られているが、これまでの成果からみた集落の形成年代は、加曽利E I式期古段階からE II式中段階である。

(2) 出土遺物(第6～8図)

① 土器(第6図)

1は加曽利E I式古段階の深鉢で2号住居跡から出土している。2は加曽利E III式の口縁部である。

② 土製品(第6図)

1は貝殻を嵌め込んだ土製耳飾である。赤く彩色した耳栓形土製耳飾の中央孔に真珠光沢をもつ貝殻を嵌め込んだ状態で出土した。耳飾本体は丁寧に成形されている。上下端が突出して平坦面をつくり、貝殻を嵌め込んだ上面側の径が若干大きい。顔料は全面に塗布されているが、孔の内面と上面は保存状態が良好、下面是やや残りが悪く、側面はわずかに残る程度である。下面是長年の展示の影響が疑われる。側面は装着時の摩擦によって除去されたものとみられる。千葉市誌には「内部にアワビ貝の一部をボタン形に加工したものを入れてある」と記載され、以後、展示や書籍等においても「アワビを象嵌」したとされてきたが、光沢を帯びた表面の色調は、アワビのような虹色の要素をもたず、わずかに青みを帯びた白銀色である。したがって、淡水貝類の殻を素材したものと訂正する。(千葉県立中央博物館の黒住耐二氏から、アワビではないのではないかと連絡をいただき、資料を見て確認をしたものであり、感謝を申し上げる。)ボタン状に加工された貝殻は、上面側に素材貝の腹縁部とみられる輪肋と高まりがあり、貝殻の内面側であることがわかる。輪肋はほぼ直線状であるので、かなり大きな貝種であろう。周囲の凸凹は新しい欠損によるものであり、本来は整円形であり、縁辺と中央孔は下面側から、とても丁寧に研磨加工されている。なお、現状では貝殻と耳飾の孔には隙間がある。出土状況や本来どのように接着していたかは不明である。いずれにせよ、出土以来70年も経ても類例のない珍品であり、縄文人の美意識が垣間見える優品といえる。2は山形土偶の右腰部～脚部、3は大きな蓋形土器で1/2強が遺存する。中央に二つの突起が付き、周囲に太い沈線による曲線意匠文をもつ。この2点は後期のものであり、当遺跡出土でない疑いが強い。4・5は手捏ね風の焼成粘土塊である。6は中央孔をもつ土器片円板である。7～13は土器片錐である。素材となった土器は、7は勝坂末、8は加曽利E I式、10・11は加曽利E II式であろう。

③ 石器・石製品(第7図)

1は石鏸、2・3は石鏸未成品。1・2は黒曜石、3はチャートを素材とする。4～7は打製石斧である。8はコハクの小礫であり、加工痕は見られない。9は黒曜石、10はチャートの剥片類である。黒曜石は8点、チャートは7点である。このほかに礫が1点30.0g、軽石が2点、計12.4gである。

土器

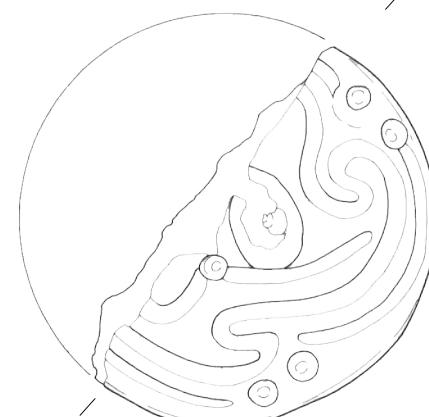


1.2 S=1/6

土製品



1



3



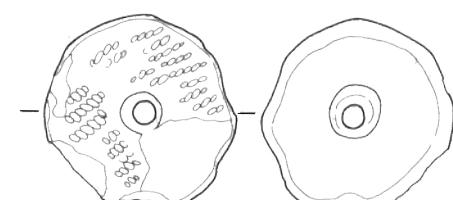
2



4



5



6



7



8



9



10



11



12



13

1~13 S=1/2

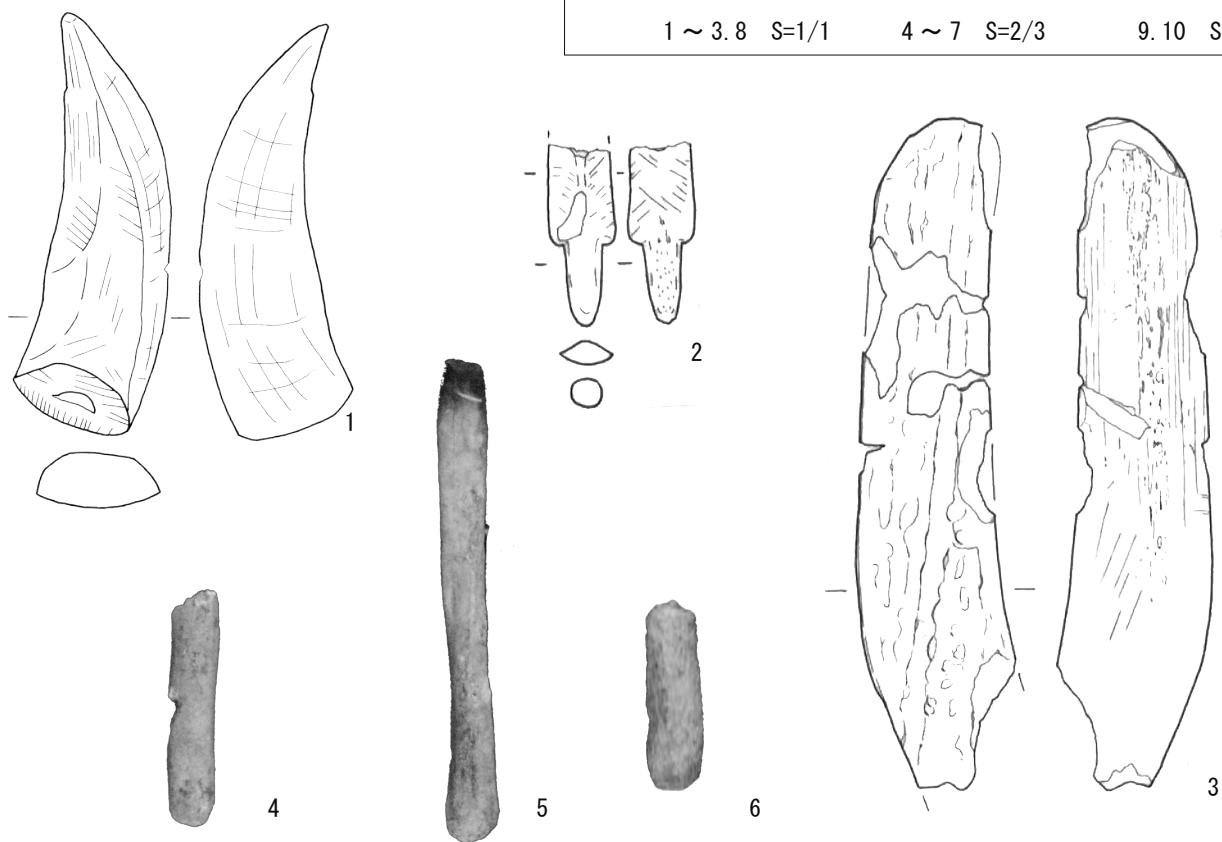
第6図 月ノ木貝塚昭和26年度調査出土遺物(1)

石器



骨角歯牙製品

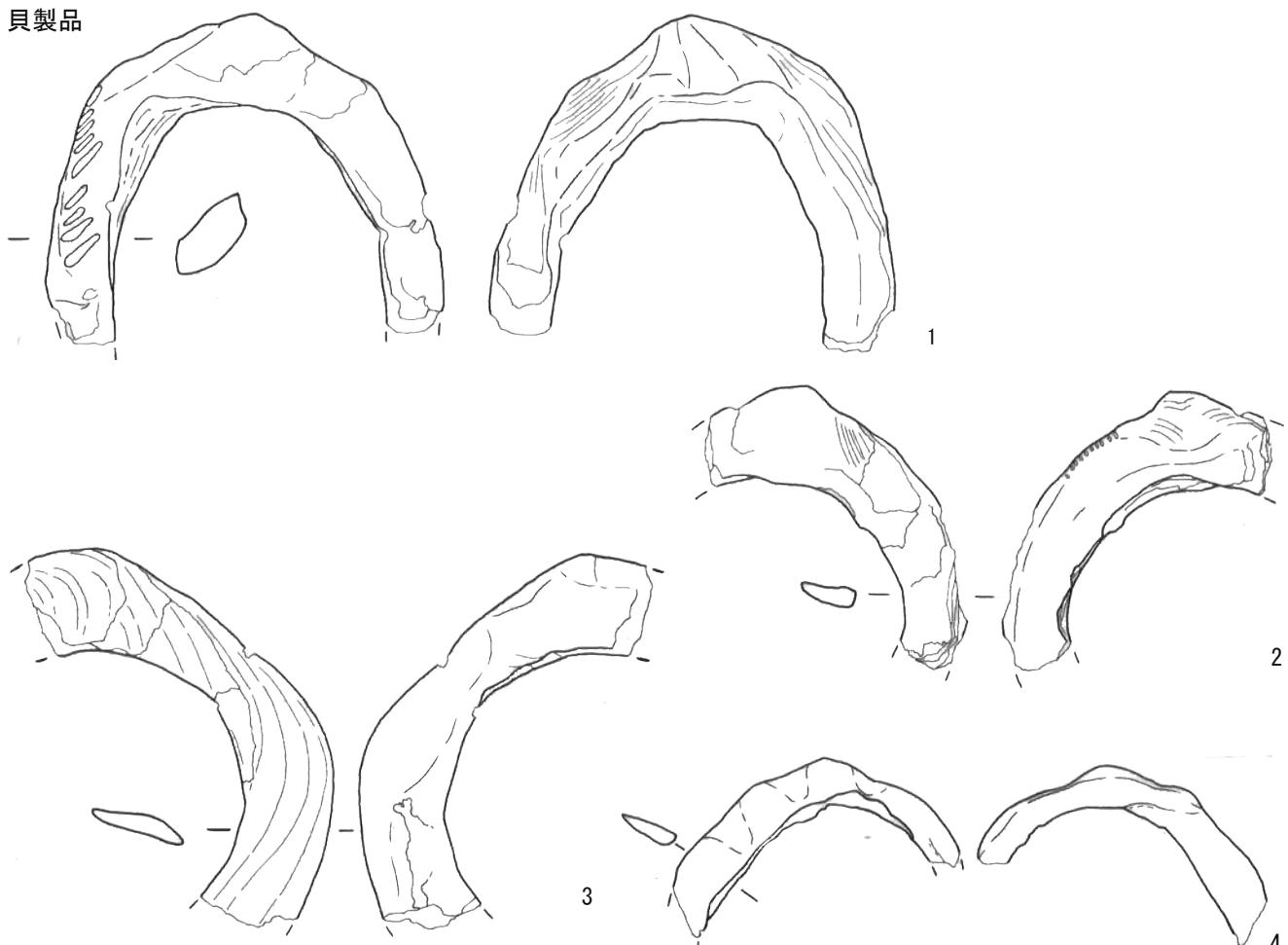
1 ~ 3. 8 S=1/1 4 ~ 7 S=2/3 9. 10 S=1/2



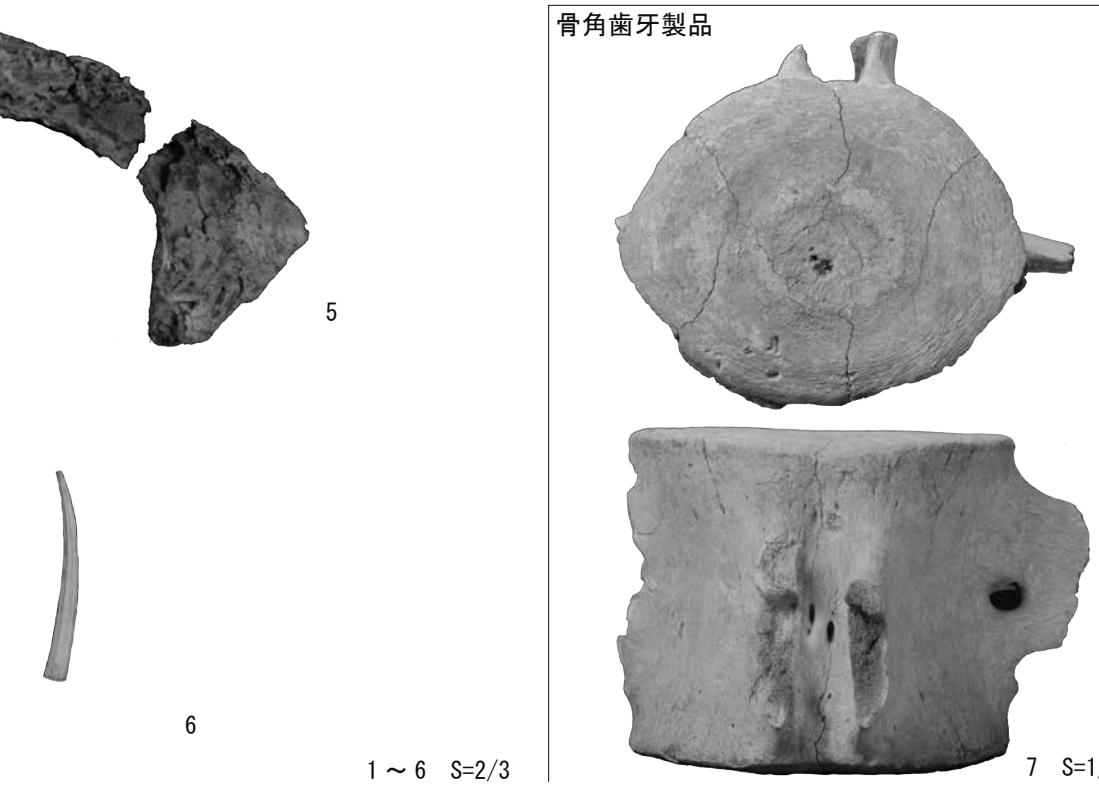
1 ~ 6 S=2/3

第7図 月ノ木貝塚昭和26年度調査出土遺物(2)

貝製品



骨角歯牙製品



第8図 月ノ木貝塚昭和26年度調査出土遺物(3)

④骨角歯牙製品(第7図、第8図7)

1はイノシシ雄犬歯を素材とした「牙斧」である。エナメル質の先端と咬耗部以外を研磨加工している。象牙質の褐色を帯びた部分がなく、全体が白色である。きわめて大きなイノシシであろう。保管中の乾燥により変形・破損をしている。2は全面加工した「骨鏸」であり、素材は鹿角とみられる。先端が欠損する長く扁平な鏸身に断面丸形の基部が付く。鏸身の片面中央には研磨によって稜が作出されている。3は鹿角製のヘラ状製品である。幹部を擦切り折断した扁平な素材を研磨して一端をヘラ状に加工する。丸みをもつ先端部は破損するが、平坦な平滑面がわずかに遺存し、光沢を帶びている。大きく欠損する反対側はややカーブして幅広になっており、使用による平滑化と斜め方向の線状痕が付く。先端から中間部は擦切り痕が残る。4・5はイノシシ腓骨製のヘラ状製品である。4はヘラの先端部、5は先端部側が焼けて黒変し、欠損している。基部、つまり近位側を両面から研磨加工しているため製品とわかる。6は素材・器種とも不明確だが、緻密性がないので、鯨骨製の可能性がある。縄文時代の類例としてヘラ状ないし骨刀状の製品が知られており、近傍では蕨立遺跡で出土している。7は鯨類の椎骨である。椎体径30.1cm、椎体長26.5cmを計る大きなものである。椎体の両面は摩滅・平滑化しており、一部は使用によるものであろう。鯨類の椎骨は東京湾東岸の多くの貝塚で出土しているが、その中で最も大きいであろう。

⑤貝製品(第8図)

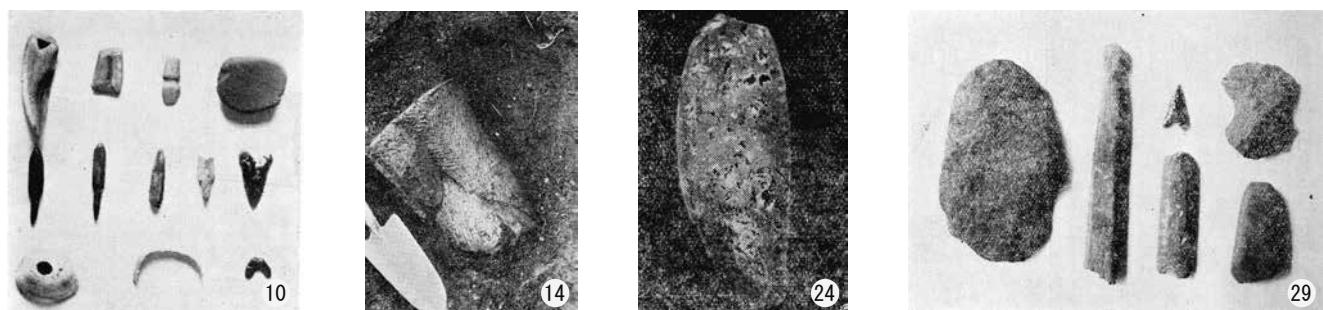
1～5はイタボガキ製貝輪である。1・2・4・5は殻頂部側で、1は殻表の研磨が明らか、他は明確な加工痕は持たないが、形状から製品または未成品であろう。3は腹縁側で全面が丁寧に研磨された精整品である。被熱により灰色に変色している。6はヤカドツノガイで、加工痕は見られないが素材として持ち込まれたものであろう。

⑥その他

粉碎した状態の糞石1点、赤色顔料塊1点がある。このうち糞石には魚骨が多数含まれていた。同定結果は「6 動物遺体」を参照されたい。

⑦現状で確認できないもの(第9図)

千葉市誌(武田1953)所収の第10図の写真のうち、当遺跡出土のものは「猪牙製品」(牙斧)1点、「土錘」(土器片錘)1点、「骨鏸」1点、イモガイ製「貝製品」1点、タマキガイ科製「貝輪」1点である。このうち、確認できたものは「骨鏸」(上記骨角歯牙製品2)のみである。イモガイの環状製品は、東京湾東岸の男性リーダーを象徴する腰飾の可能性がある。同書第14図の「附属小室の大型粗製土器」や、第24図の「タカラ貝製加工品」(タカラガイ製品)、第29図の大型打製石斧も確認できない。なお、第29図の他の資料は市内の他の遺跡出土である。



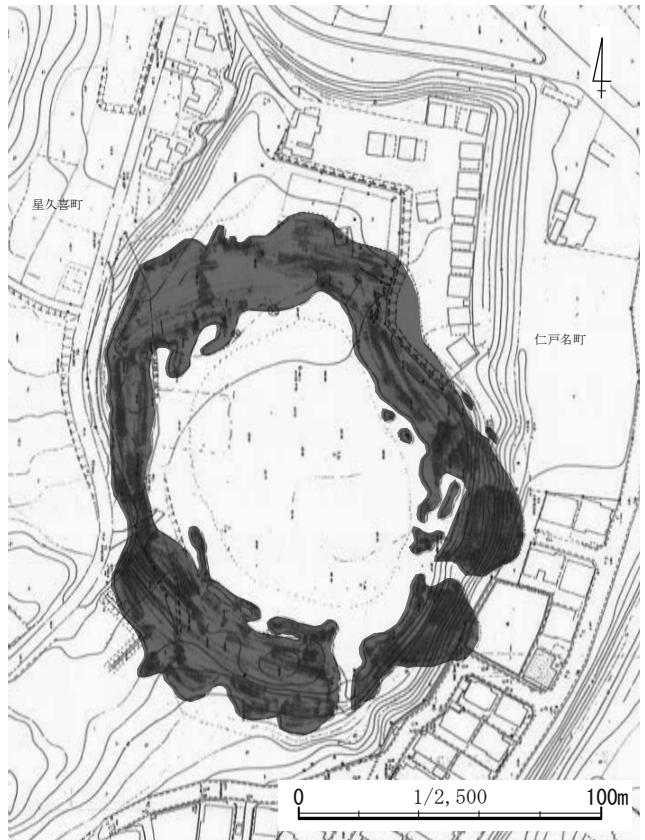
第9図 千葉市誌 第10・14・24・29図

3 平成3年度ボーリング調査

平成3年度に貝層の分布を把握するためのボーリング調査を行っている。この時に作成された第10図は、約50cm以下で確認された貝層の堆積分布図である。なお、地表面で破碎貝の散布が認められただけの地点は、耕作土等の影響で攪乱されたものと考え、貝層範囲から除外している。

昭和26年度調査では、北側に開口部があるとの認識だったが、ボーリング調査では、南側と東側の2か所で貝層が途切れる地点を確認している。しかし、東側は急斜面のため、開口部としての利用はできなかつたのではないかと考察している。

ボーリング調査で採集された主な貝類は、ハマグリ・シオフキ・アサリ・イボキサゴであり、この他にオキアサリ・オキシジミ・カガミガイ・チョウセンハマグリ・アカニシ・ツメタガイ・ウミニナを確認している。



第10図 月ノ木貝塚平成3年度測量図

4 令和5年度立会調査報告

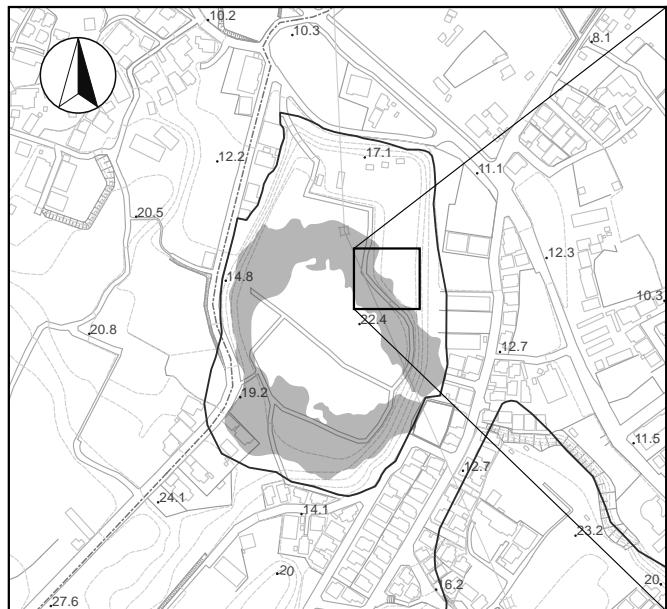
(1) 調査の経緯と方法

令和4年11月29日付で千葉東建設から宅地造成のため、文化財保護法93条に基づく届出が提出された。既に造成された部分は慎重工事、史跡に隣接する法面は工事立会の取り扱いとし、令和5年4月5日から同月28日の期間に立会調査を行った。対象地は、史跡に隣接する民有地との境界部分、環状に巡る貝層範囲の北東部にあたる。民有地に分布していた貝層の一部は、過去の造成工事で既に削平されているが、今回、宅地造成のための法面工事の際に新たに貝層が露出した。貝層が露出した地点をA地点・B地点とし、A地点は南面する断面を東から西へA-1～A-7の7区に、B地点は西面する断面を南から北へB-1～B-3の3区に設定した。調査では、法面の精査を行って、貝層の堆積状況を記録し、貝サンプルを採取したうえで、工事対象範囲の掘削と遺物の採集を行った。第11図は、記録写真から作成した各断面のオルソ画像と土層断面図である。なお、貝層範囲は千葉県教育委員会(2021)に準拠した。

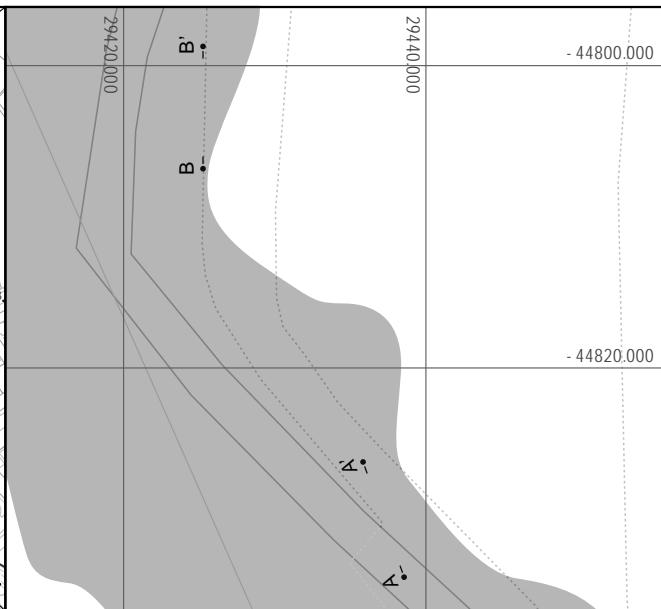
(2) 貝層と検出した遺構

A地点で竪穴住居跡1軒、土坑1基、B地点で土坑状の落ち込み2基を検出した。いずれも加曽利EⅡ式期である。ここでは、貝層規模が大きく、且つ、竪穴住居跡1軒が検出されたA地点の堆積状況を中心に記載する。法面の土層堆積から得られた基本層序は、表土(1層)、黒褐色土層(16層)、暗褐色土層(ローム漸移層、17層)、黄褐色の軟質ローム層(18層)の大別4層からなり、貝層は黒褐色土層中もしくはその上位に堆積する。貝層の堆積が最も顕著なA-2地点では、黒褐色土層上面から軟質ローム層中位にかけて竪穴状の掘り込みを確認している。径約3m以上、本来の確認面からの深さは0.6mであり、整った壁断面の立ち上がりや平坦な底面から竪穴住居跡と判断できるが、断面のみの検出であり、平面形態や炉・柱

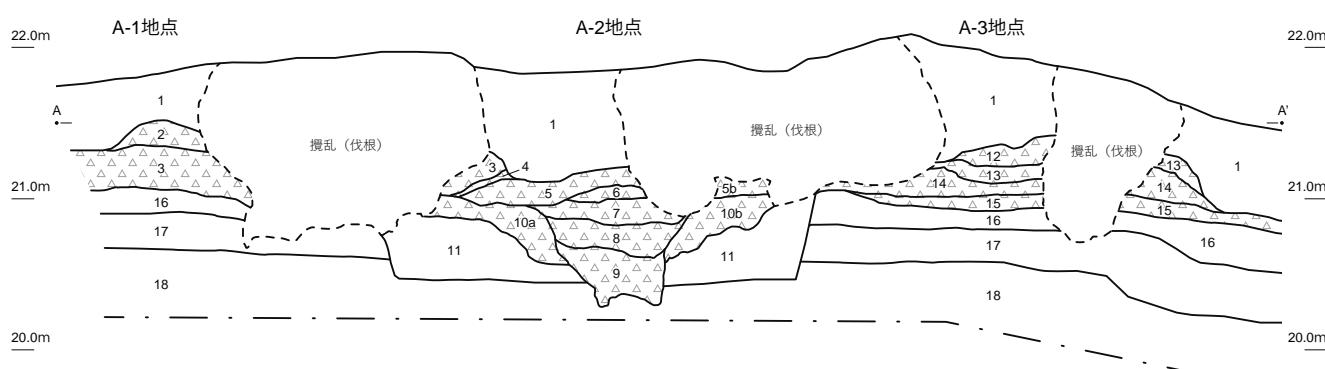
遺跡範囲 (S=1/5,000)



調査範囲 (S=1/500)



A-A'セクション (S=1/50)



B-B'セクション (S=1/50)



第11図 令和5年度調査地点・貝層断面

穴構造は不明である。出土土器から本遺構の帰属時期は加曽利E II式期と推定される。覆土は、ローム土と二枚貝をわずかに混じる褐色土(11層)と、しまりのない暗褐色土主体の混貝土層(10a層・10b層)からなる。貝層の主体は、住居覆土を掘り込む土坑の覆土内およびその上位に堆積しており、イボキサゴとハマグリ・シオフキを主体とする層厚1mほどの貝層(9層～3層)からなる。現地記録および整理作業での写真精査に基づいて貝層断面を分層すると、イボキサゴ主体でハマグリ・シオフキが目立つ混土貝層(9層)、混貝土層(8層)、ハマグリ・シオフキ主体の混土貝層(7層)、イボキサゴ純貝層(6層)、ハマグリ主体の純貝層(5層)、混貝土層(4層)、イボキサゴ主体でハマグリを混じる純貝層(3層)の7層に区分できる。A-2地点を挟んで南北に隣接するA-1地点(2層・3層)とA-3地点(12層～15層)の貝層とは、攪乱(伐根)により断絶するものの、攪乱内にも貝が混じっており、本来は一連の面状貝層を形成していたものと推定される。一方、隣接するB地点でも貝層を確認したが、A地点と比べてその規模は小さく、ブロック状に点在するのみである。B-1地点とB-2地点では、軟質ローム層もしくは暗褐色土層まで及ぶ土坑状の落ち込みに貝層を形成するが、半壊した断面のみの観察では遺構かどうかの判断はできなかった。前者は黒褐色土に貝が混じる混貝土層、後者は落ち込みの底面から30cmほどの厚さで混土貝層を形成し、その上を黒褐色土が覆っていた。

(3) 出土遺物

①土器(第12図)

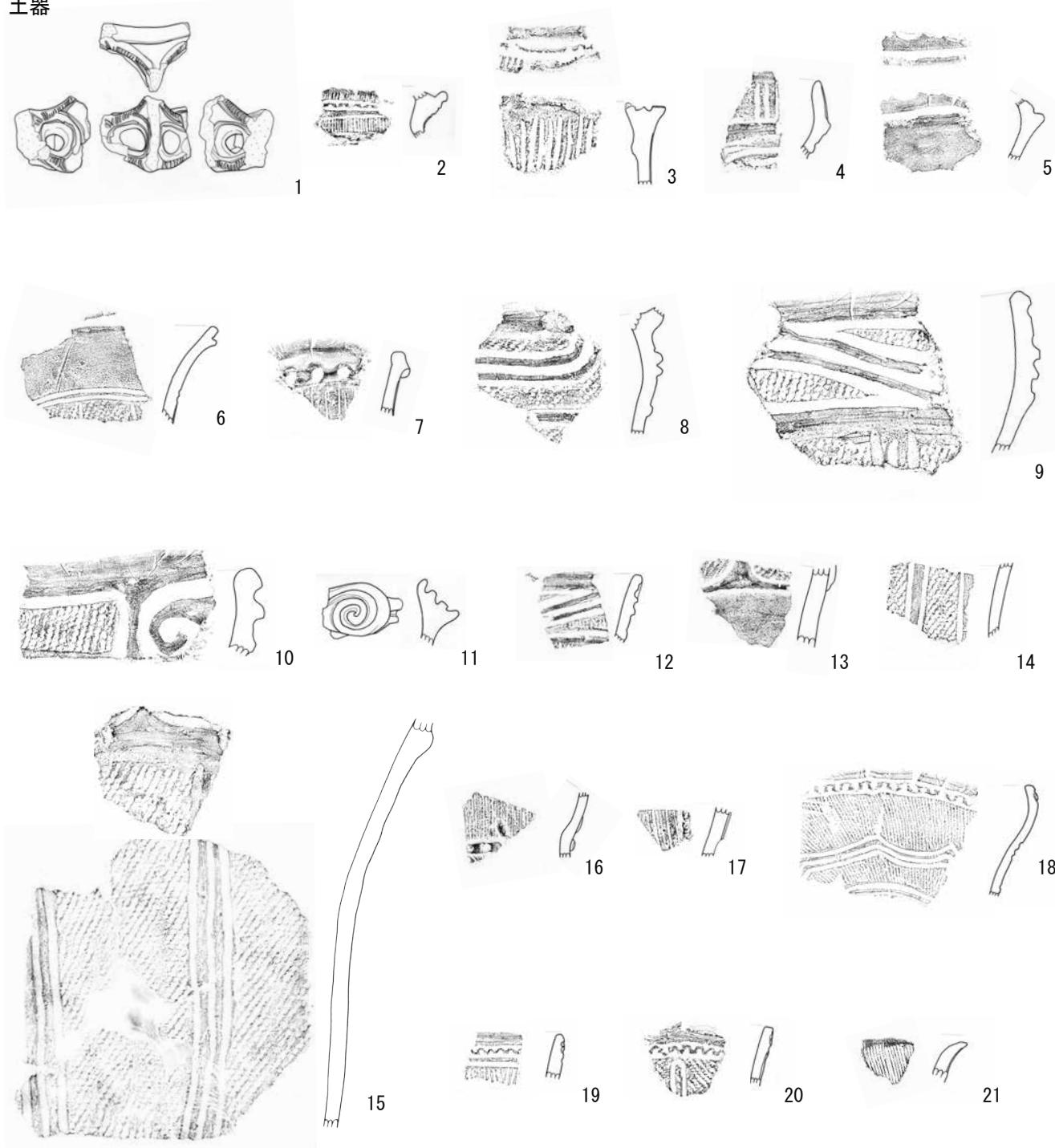
ごく小片を除く941点を観察・分類した。縄文土器936点、弥生土器1点、土師器・須恵器4点であった。弥生土器と土師器・須恵器は小片のみであった。縄文土器のうち有文731点の内訳は、勝坂・阿玉台式期後半7点、加曽利E I式43点、加曽利E I～II式35点、加曽利E II式235点、加曽利E III式3点である。E II式の古段階から中段階がほとんどを占め、E II式新段階以降の土器はほとんど見られなかった。E II式より古いものは数が少なく、まとまりをもたないことから、調査地点の貝層の形成年代は、加曽利E II式期としてよいであろう。

図示したのは21点である。1～3は勝坂式末またはその時期の土器、4～8・11は加曽利E I式、12・13は加曽利E I式からE II式、9・10・14～20は加曽利E II式で、9・10・14・15はキャリバー形、16・17は曾利系、18～20は連弧文系である。21は弥生中期の甕の口縁部片である。弥生時代中期中葉の池上式・中里式にみられる、6条1組の縦方向のハケ目が確認できる。千葉市内においてはこの時期の遺跡が非常に少なく、周辺では矢作貝塚で同時期の土器片が出土している程度である。断片的な資料のみであるが、都川流域に生活域があったことを示唆する資料として提示しておきたい。

②土製品(第12図-22～24)・石器・貝製品・骨製品等(第13図)

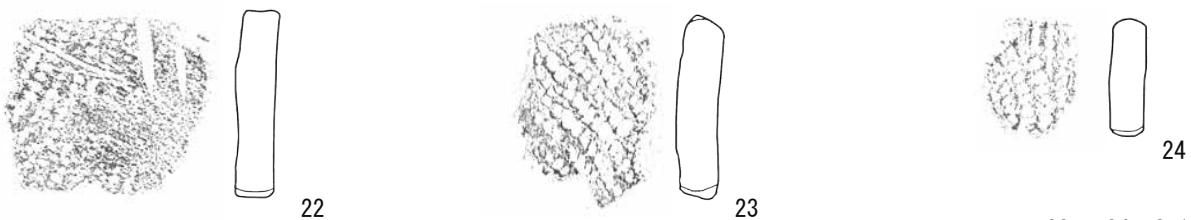
土製品は土器片錐3点である(22～24)。加曽利E式前半期の集落遺跡では、立地を問わず多数出土することが特徴であり、土器の数量からみて比較的少ないといえる。石器は黒曜石製の石鏃1点(1)、同破片剥片3点(図外)、磨石類3点(2～4)、打製石斧2点(5・図外)、磨製石斧1点(7)、砥石2点(8・9)、礫12点(図外)である。6は大きな石皿・台石類の破片を再利用したものと考えられる。8の砥石は時期が異なる疑いがある。骨製品1はイノシシ腓骨左の遠位側を加工した刺突具、もしくは髪針の先端部であろう。貝製品は1～3がハマグリ製の貝刃である。4～21はハマグリ製のヘラ状製品である。5は腹縁から内面にかけて線状痕がつく、類例が少ないものである。それ以外の17点は東京湾東岸でこの時期に盛行した腹縁の端部に、腹縁と直交する方向の線状痕がつくものである(西野2002)。一部は平坦な研磨面を形

土器



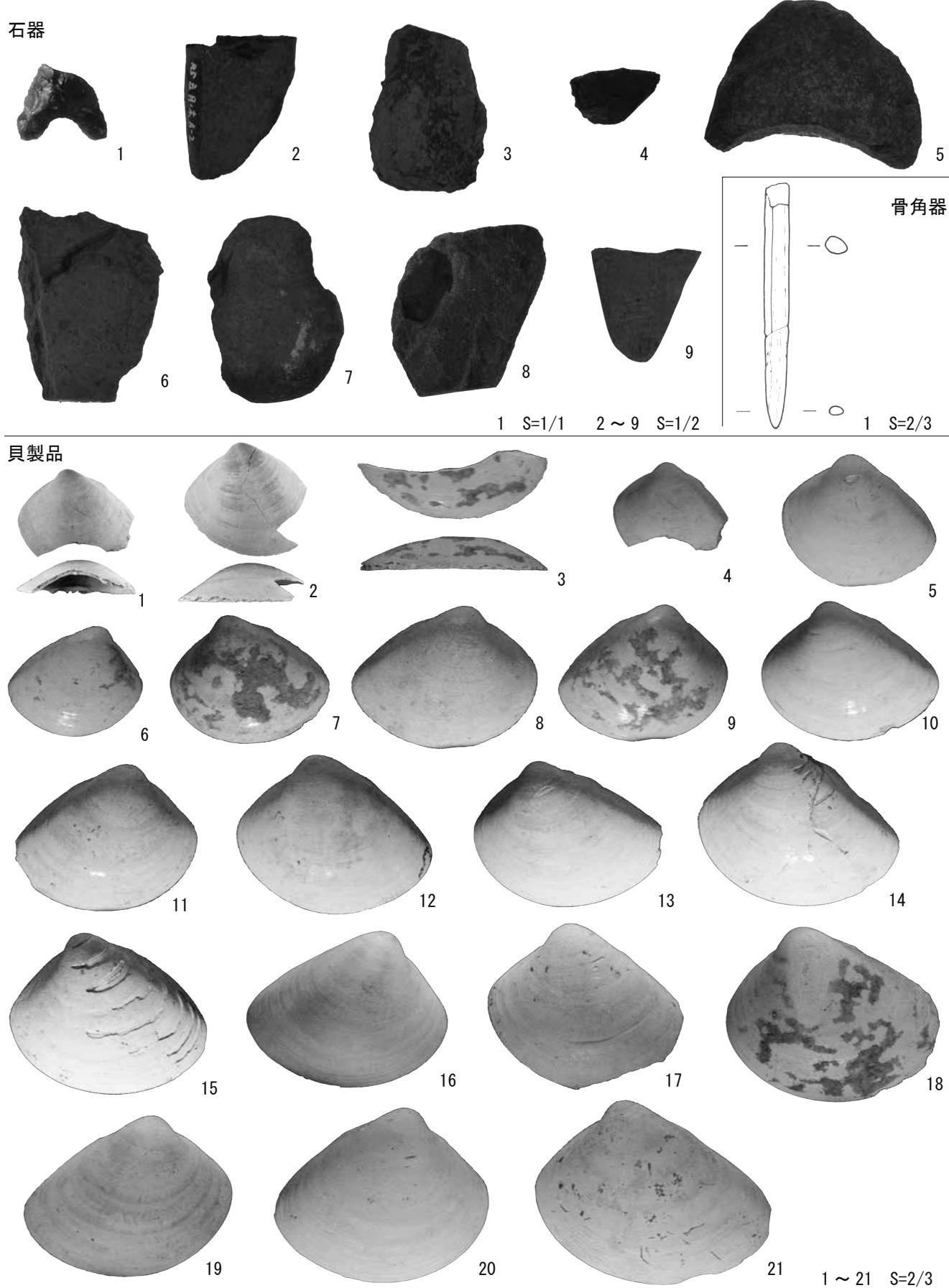
1 ~ 21 S=1/5

土製品



22 ~ 24 S=1/2

第12図 月ノ木貝塚令和5年度調査出土遺物(1)



第13図 月ノ木貝塚令和5年度調査出土遺物(2)

成する。

ヘラ状貝製品は、現地採取と簡易サンプル＝廃棄対象のなかから、腹縁部が遺存する大きめのハマグリを観察し、使用痕をもつものを抽出した。122点を観察したが、腹縁の剥離や劣化により観察不能としたものが35点ある。観察可能な87点のうち、ヘラ状貝製品は12点、使用痕跡をもたないものは75点であった。13.8%という高率で使用痕が認められたことになる。第1表に3区分ごとの殻長計測値分布を示した。これによると、加工／使用痕跡を確認するために抽出したものは55mm以上の個体で、60mm～80mm程度のものが多いが、製品の平均±標準偏差は81.5mm±10.8mmと、これらのなかでも大きめのものを使用することが多いことがわかる。ただし、65mm～100mmにばらついており、特定のサイズを選んだ形跡はない。

③その他

焼けた灰の塊1点(小塊)が出土した。

6 動物遺体

今回報告する令和5年の工事立会のほか、平成5年の住宅建設に伴う確認調査で採取された貝サンプルの分析成果を併せて報告する。

(1) 資料の概要

分析対象は、以下の2度の調査で採取した貝サンプル検出及び、令和5年度に現地で採集した骨等である。第2表に貝サンプル一覧を示す。

平成5年 未洗いの状態で保管されていた整理箱1箱分、水洗前で約19リットルの貝サンプルの全部を分析対象とした。この調査が行われた「1993.9.16～17」のラベルの付いた土器の内容は、A1トレンチ：縄文劣化小片のみ。EⅡ1点、A1-a 貝層：EⅡ7点、土師3点、A2-a：小片1、A2-b：EⅡ2点、A2-b 溝：EⅠ～Ⅱ3点、A3-a：磨滅小片と中近世であった。貝サンプルの時期は加曾利EⅠ式～Ⅱ式と推定される。

令和5年 やや離れたA地点、B地点にかけて、

第1表 使用痕観察したハマグリの計測値分布

mm	観察不能	観察可能	ヘラ状製品
-30.0			
-35.0			
-40.0			
-45.0			
-50.0			
-55.0	1	2	
-60.0	7	9	1
-65.0	9	14	
-70.0	3	11	1
-75.0	5	12	1
-80.0	6	9	2
-85.0	2	7	1
-90.0		7	4
-95.0	2	3	1
-100.0		1	1
試料数	35	75	12
平均	68.49	71.91	81.52
標準偏差	10.09	10.74	10.82

第2表 貝サンプル一覧

貝層名	区分	扱い	土壌	採取量	分析量	備考
A-1①	2層	詳細	1	9.5ドル	5.0ドル	層別3カット
A-1②	3層	詳細	1	9.0ドル	5.0ドル	
A-1③	2層・3層一括	詳細	1	5.0ドル	5.0ドル	
A-2①	3層	詳細	1	2.1ドル	2.1ドル	層別11カット
A-2②	4層	詳細	1	2.0ドル	2.0ドル	
A-2③	5層	詳細	1	10.0ドル	5.0ドル	
A-2④	5b層	詳細	1	11.0ドル	5.0ドル	
A-2⑤	6層	詳細	1	8.0ドル	5.0ドル	
A-2⑥	7層	詳細	1	13.0ドル	5.0ドル	
A-2⑦	8層	詳細	1	14.0ドル	5.0ドル	
A-2⑧	9層	詳細	1	4.0ドル	4.0ドル	
A-2⑨	10a層	詳細	1	7.3ドル	5.0ドル	
A-2⑩	10b層	詳細	1	4.8ドル	4.8ドル	
A-2⑪	そうじ	簡易	2	—	—	
A-3①	12層・二枚貝	詳細	1	9.0ドル	5.0ドル	層別5カット
A-3②	13層・混土貝	詳細	1	9.0ドル	5.0ドル	
A-3③	14層・二枚貝	詳細	1	15.0ドル	5.0ドル	
A-3④	15層	詳細	1	10.7ドル	5.0ドル	
A-3⑤	そうじ	簡易	1	—	—	
A-4①		詳細	1	14.0ドル	5.0ドル	一括1カット
A-4②	そうじ	簡易	1	—	—	
A-7	そうじ	簡易	1	—	—	一括1カット
B	そうじ	簡易	1	—	—	一括1カット
B-1①		詳細	1	11.0ドル	5.0ドル	一括1カット
B-1②	そうじ	簡易	1	—	—	
B-2①		詳細	1	10.5ドル	5.0ドル	一括1カット
B-2②	そうじ	簡易	1	—	—	
B-3①		詳細	1	16.0ドル	5.0ドル	一括1カット
B-3②	そうじ	簡易	1	—	—	
			30	194.9ドル	97.9ドル	
小計		詳細	21			
		簡易	9			
H5確認一括			1	19.0ドル	19.0ドル	
合計			22	213.9	116.9 リットル	

A-1～4の4か所で層別サンプルを、B-1～3の3か所で一括サンプルを採取した(第11図)。合計で21単位、194.9リットルを採取し、カットごとに最大5リットル、合計97.9リットルを分析・保管対象とした。貝層の年代は、土器の内容から加曾利E II式前葉～中葉と推定される。残りのサンプルと各地点でこぼれ落ちた貝層は、4mmのフライにかけて遺物を回収し、残りの土砂や貝殻等は廃棄した。

(2) 貝類

貝種組成 14科19種の63,844個体を同定した(第2表)。貝種組成(第3表)は全体でみるとイボキサゴが90.0%を占め、ハマグリが6.4%、シオフキが1.2%混じる。アラムシロとウミニナ科はイボキサゴのかご漁に伴う混獲とみられる。これ以外の種はごく少ない。都川水系の貝塚の組成は、イボキサゴを除いた組成でハマグリが半分に届かず、次いでアサリ、シオフキの順となる二つの特徴をもつが、当遺跡の組成はいずれも異なっている。内湾の砂底干潟先端部でのイボキサゴ漁を主体とし、砂泥底干潟でハマグリ漁に伴って他の種も採取したものとみられる。湾奥泥底に多いマガキ、オキシジミ、オオノガイ、汽水域のヤマトシジミは河口付近で採取されたものであろう。サンプル間の差は、平成5年採取のものも含めてほとんど認められず、ハマグリや他の貝種がとくに多いサンプルも見当たらない。

第3表 貝サンプル一覧

種名 No.	全体	A-1①	A-1②	A-1③	A-2①	A-2②	A-2③	A-2④	A-2⑤	A-2⑥	A-2⑦	A-2⑧	A-2⑨	A-2⑩	A-3①	A-3②	A-3③	A-3④	A-4	B-1	B-2	B-3	H5
イボキサゴ	57451	2939	2897	2280	974	1480	2816	2452	3183	1297	2116	1554	1032	3734	3258	2704	1653	807	2137	3127	3057	2840	9114
ハマグリ	4078	317	214	166	120	54	186	169	181	253	160	89	62	29	129	120	155	48	196	158	240	164	868
シオフキ	786	52	27	18	31	16	43	47	84	105	11	31	5	5	36	46	57	10	32	16	30	24	60
アラムシロ	644	32	35	34	8	12	36	37	47	22	23	28	2		25	30	24	1	24	37	57	29	101
ウミニナ科	413	13	17	25	1	10	14	20	15	16	23	11	10	12	26		12		17	27	23	17	104
アサリ	201	18	6	6	4	1	14	8	9	7	2	4		1	11	11	18	2	8	9	10	3	49
マガキ	89	11	5	7	1	1	4	6	2	9	7	1	3		4	5	4		5	2	6	1	5
ツメタガイ	73	4	6	2	1	4	1		4	11	5	1	4		2	2	2		5		8	1	10
ヤマトシジミ	21		2	2				1		3	2	1						1	6	3			
アカニシ	17	1	1						4	3								2			2		4
スガイ	13	1								2	2					2	1				2		3
カワニナ	15	5	1	1						1								1		1	1	1	3
マテガイ	13	4	1					1								3	2	1					
カガミガイ	10	2		1						1	1					1	1		1				2
オキシジミ	7						1			1							1	1		2			1
オオノガイ	5																						2
イボニシ	4									1													2
サルボオ	2									1													
オキアサリ	2																	1					
合計	63844	3399	3212	2542	1140	1579	3114	2743	3525	1728	2357	1723	1118	3783	3497	2922	1931	871	2428	3384	3440	3080	10328
分析体積(l)	126.4	9.5	5.0	5.0	2.1	2.0	10.0	5.0	5.0	5.0	5.0	5.0	4.0	4.8	5.0	5.0	5.0	5.0	5.0	5.0	5.0	5.0	19.0
微小貝	3560	200	177	36	152	51	627	323	102	300	156	57	47	30	522	84	90	54	163	84	75	230	—

第4表 貝種組成

種名 No.	全体	%	A-1	A-2	A-3	A-4	B-1	B-2	B-3	H5
イボキサゴ	57451	90.0%	8116	20638	8422	2137	3127	3057	2840	9114
ハマグリ	4078	6.4%	697	1303	452	196	158	240	164	868
シオフキ	786	1.2%	97	378	149	32	16	30	24	60
アラムシロ	644	1.0%	101	215	80	24	37	57	29	101
ウミニナ科	413	0.6%	55	132	38	17	27	23	17	104
アサリ	201	0.3%	30	50	42	8	9	10	3	49
マガキ	89	0.1%	23	34	13	5	2	6	1	5
ツメタガイ	73	0.1%	12	31	6	5	8	1	1	10
ヤマトシジミ	21	0.0%	4	7	1	6	3			
アカニシ	17	0.0%	2	7	2		2			4
スガイ	13	0.0%	1	4	3		2			3
カワニナ	15	0.0%	7	2		1	1	1	1	3
マテガイ	13	0.0%	5	1	6					
カガミガイ	10	0.0%	3	2	2	1				2
オキシジミ	7	0.0%		2	2		2			1
オオノガイ	5	0.0%			3					2
イボニシ	4	0.0%		1		1				2
サルボオ	2	0.0%		2						
オキアサリ	2	0.0%		1	1					
合計	63844	100.0%	9153	22810	9221	2428	3384	3440	3080	10328

サイズ組成 いっぽう、サイズにはサンプル間の差がかなりみられる(第5表)。イボキサゴの殻径は、全体の平均±標準偏差が $13.52\text{mm} \pm 1.33\text{mm}$ と、都川・村田川貝塚群の加曽利E I式期の平均的な数値だが、13mm未満が多いものから、14mm以上が多いものまでみられる。シオフキの殻長は、全体で $35.80\text{mm} \pm 4.33\text{mm}$ と中期としてはやや大き目で、どのサンプルでも40mmを超えるものが混じる。ハマグリの殻長は平均±標準偏差が $32.83\text{mm} \pm 7.19\text{mm}$ である。平均の数値は都川・村田川貝塚群の中期中葉の平均に近い。年齢でいうと満1歳から1.5歳が中心である。ただし、当遺跡の場合、50mmを上回る大きな個体もかなり混じっている。このサイズは後期以降、古墳時代まではかなり採取しているが、中期ではごく少なく、サンプルにはほとんど入らない。時折混じる70mmを上回るものは、水摩や虫食いによって死んだ貝殻を貝刀やヘラに加工するために持ち帰ったものが多い。当遺跡ではこのサイズのハマグリを採取しているのである。近年調査をしているへの台貝塚も同様である。

考察 当遺跡が立地する都川水系は、東京湾東岸の貝塚群のなかでも、もっとも貝塚集落が集中する中心的なエリアである。同一の漁場を利用する集落間の競合により資源の減少・枯渇が進んだ様子を伺うことができる。加曽利貝塚の北貝塚3区Cトレンチ(貝層断面観覧施設)の南壁から採取したハマグリの成長線分析の成果によれば、ハマグリは生殖年数に達する前後に成長した時点でほとんど採りつくされてしまう乱獲の状況にあり、時期を追うごとに採取する季節が早くなり、捕獲圧が激しくなっていた(樋泉1999)。ハマグリの減少によって、主要種以外の利用(ヤマトシジミ・マガキ・オキシジミ・スガイ等)が進んだこともわかっている(西野・菅谷・米倉他2016)。貝類資源利用の取り決めの破綻や、つよい連繋と共同意識によって成り立っていた地域社会のほころびが見える。このことが中期大型貝塚群の終焉につながった可能性がある。

月ノ木貝塚の貝層形成の主体は加曽利E I式期からE II式の前半期とみられる。加曽利貝塚でハマグリ資源が減少し、捕獲圧によってサイズが小型化した時期にあたっているにも関わらず、大きなハマグリが多数混じっている。おそらく、主要な漁場は都川本谷の河口ではなく、他の集落が利用しない千葉寺谷・宮崎谷の河口から千潟の先端までの付近であったのであろう(第1図)。仁戸名川谷のさらに奥に立地する菱名貝塚でも、主な漁場は、他の集落と競合しない生実谷河口部であったと推定された(西野2023)。

当遺跡の立地は、都川河口を漁場とすることも充分可能であったものとみられる。漁場までの距離をみれば加曽利・滑橋・さら坊・蕨立よりむしろ近い。千葉寺谷・宮崎谷のみを利用したのか、都川河口も利用することがあったのかは今後の課題である。近年発掘調査を実施したへの台遺跡の貝層の分析のなかで検討していきたい。

(3) 魚類

資料と分析方法 対象資料には、貝サンプルから水洗選別により得られた資料(貝サンプル資料:令和5年度調査)と発掘調査現場で目視により採集された資料(現地採集資料:令和5年度調査と昭和26年度調査)および採集した糞石から検出された資料(昭和26年度調査)がある。同定対象とした部位は、前上顎骨、主上顎骨、歯骨、角骨、方骨、舌顎骨、主鰓蓋骨、基後頭骨、椎骨を必須部位とし、分類群の骨格的特徴に応じてその他の部位も適宜対象に加えた。その他の脊椎動物遺体についても、同定可能な資料のすべてを抽出したが、貝サンプル資料については、イノシシ・シカをはじめ、哺乳類ではネズミ類、その他分類群では小形の鳥類(未同定)、ヘビ類、カエル類が若干量検出されたのみであり、記載は割愛する。なお、同定は原則として現生標本との比較によって行った。比較に用いた標本は分析者所蔵の現生標本である。

第5表 貝類計測値分布表

イボキサゴ殻径

mm	A-1①	A-1②	A-1③	A-2①	A-2②	A-2③	A-2④	A-2⑤	A-2⑥	A-2⑦	A-2⑧	A-2⑩	A-3①	A-3②	A-3③	A-4①	B-1	B-2	B-3	H05
-8.0																				
-9.0																				
-10.0	1							2					1							
-11.0	3	5		1	1	3	7		2	5		5		9		1				
-12.0	11	21	17	8	5	15	28	2	10	20	11	73	26	18	29	11	6	4	2	1
-13.0	27	47	64	21	20	49	52	7	20	30	18	96	88	68	67	47	19	18	23	13
-14.0	59	55	60	39	50	56	41	23	26	13	43	20	55	76	49	76	24	28	30	22
-15.0	50	27	19	21	20	44	39	85	13	5	50	4	22	26	19	48	9	29	8	13
-16.0	20	12	10	7	2	22	24	63	18	1	33	2	8	9	13	10	11	26		3
-17.0	4	2	1	1	1	10	7	19	4	1	15		1	2	2	6	3	14		1
-18.0	1	1	1	1				1	1		2			1		1	1			1
-19.0	1						1				1									
-20.0																				
標本数	173	169	177	99	99	200	200	200	94	76	173	200	200	200	189	200	73	120	63	54
平均	13.88	13.30	13.17	13.52	13.49	13.72	13.41	14.82	13.74	12.51	14.32	12.32	13.05	13.28	13.02	13.61	13.74	14.44	13.31	13.74
標準偏差	1.18	1.27	1.16	1.14	0.91	1.35	1.51	0.95	1.50	1.10	1.37	0.79	0.96	1.04	1.28	1.12	1.37	1.36	0.73	1.14

ハマグリ殻長

mm	A-1①	A-1②	A-1③	A-2①	A-2③	A-2④	A-2⑤	A-2⑥	A-2⑦ (8)	A-3①	A-3②	A-3③	A-4①	B-1①	B-2①	B-3①	H05
-12.0	1							2	1	2					1		
-16.0	4							1	3	6	2			2	2		
-20.0	4	4						2	3	1	3	1		2	2		
-24.0							1	2	4	4	1	1	2	1	8		4
-28.0	6	17	7	7	10	6	11	21	18	8	10	7	9	11	39	15	10
-32.0	41	36	25	33	22	32	37	35	32	34	33	21	45	40	68	28	13
-36.0	58	45	35	49	38	27	34	34	29	27	32	48	46	32	44	24	8
-40.0	20	8	12	10	18	9	11	13	8	19	8	21	15	11	15	8	4
-44.0	4	3	4	4	5	3	3	3	2	6	1	3	4	3	5	5	3
-48.0	2				2	2	2		3	1	2	3	1	3	2	1	
-52.0	2	2			1	2		2	1		1	2		3		1	
-56.0	1	1	2		1	2	2	3			1		3				
-60.0					3	1		1					1	1			
-64.0	1						3				1			1	1		
-68.0								4					1	1	1		1
-72.0								2									
-76.0									1								
-80.0										1							
-84.0											1						
-88.0												1					
-92.0												1					
-96.0												1					
標本数	142	118	85	103	101	86	103	128	106	106	85	113	125	104	193	87	44
平均	32.65	32.34	33.49	32.90	34.70	33.70	33.82	34.10	31.96	32.07	31.72	33.68	33.07	33.45	31.28	31.77	31.99
標準偏差	6.61	5.52	4.95	3.33	6.44	6.43	6.88	11.44	10.68	8.35	3.83	8.47	4.64	6.83	6.84	6.10	7.57

シオフキ殻長

mm	A-1	A-2③	A-2④	A-2⑤	A-2⑥	A-3①	A-3②	A-3③	A-4①	B-2①
-12.0										
-16.0										
-20.0										
-24.0								1		
-28.0		1	1	1		3	5		2	
-32.0	1	2	6	5	10	6	11	5	4	3
-36.0	12	11	18	37	28	20	10	22	9	15
-40.0	19	10	9	24	18	11	6	14	6	9
-44.0	5	4	1	5	6	7	2	12	4	5
-48.0	2	4		2		3		6	1	
-52.0						2				
-56.0										
-60.0										
標本数	39	32	36	74	62	52	35	59	26	32
平均	37.28	37.11	34.50	35.50	35.30	36.52	32.37	37.27	35.70	35.74
標準偏差	3.63	4.90	2.95	3.52	3.48	5.32	4.91	4.46	4.83	3.37

アサリ殻長

mm	R5全体
-12.0	
-16.0	
-20.0	
-24.0	1
-28.0	5
-32.0	21
-36.0	14
-40.0	19
-44.0	4
-48.0	3
-52.0	2
-56.0	
-60.0	
標本数	69
平均	34.39
標準偏差	5.77

貝サンプル資料 合計362点(アジ科稜鱗・タイ科遊離歯を除く)、軟骨魚綱(板鰓類) 2分類群、硬骨魚綱19分類群が同定された(第6表)。同定標本数(以下では「NISP」)による採取単位・層位別の組成を第7表に、地点別の組成を第14図に示したほか、一定量の標本が得られたA-2地点のみは採取単位・層位別の組成を第15図に示した。第14・15図には、サンプル1ℓあたりに含まれる魚骨量(魚骨包含密度=NISP/ℓ)を併示し、第14図のみメッシュ別の魚骨検出比を加えた。第14図(中)で各地点の合計から得られた魚骨包含密度をみると、最大5.6点/ℓ(A-4地点)、最小1.2点/ℓ(A-3地点)、合計値の平均では3.9点/ℓとなった(標本数が少ないB地点の一部を除く合計値により算出した場合は4.2点/ℓ)。一部を除き、概ね3.0点/ℓ~6.0点/ℓの範囲にあり、この値は東京湾東岸中期貝塚群に共通してみられる傾向である。参考として、加曾利貝塚(中期)では、3.0点/ℓ~6.0点/ℓ(平均4.3点/ℓ)の値が得られている(服部2017)。

次に、メッシュ別の魚骨検出比を第14図(右)でみると、いずれのサンプルにおいても資料の大半が1mmメッシュで検出されていることがわかる。同様の検討を行った加曾利貝塚(中期)では、1mmメッシュで7割前後、2.5mmメッシュで3割弱、残りが5mmメッシュで検出されている。この他にも経験則として1mmもしくは0.5mmメッシュでの検出率が卓越することが当該地域の中期貝塚の共通の傾向として指摘できるが、なかでも本貝塚では小型資料の割合がかなり高い印象を受ける。

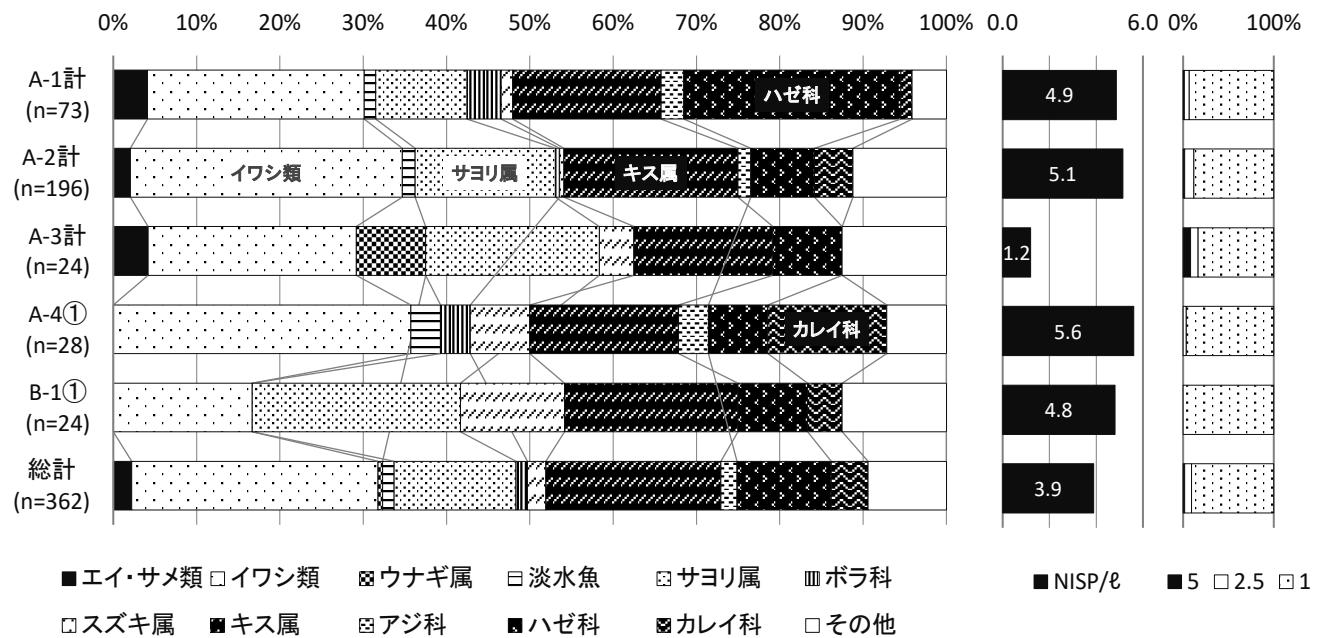
魚種組成を第14図(左)でみると、各地点の合計では、イワシ類(ニシン科主体、マイワシ・カタクチイワシをわずかに含む)が最も多く、これにサヨリ属・キス属・ハゼ科が僅差で次ぐ。この他にはカレイ科が普通にみられるほか、ボラ科・スズキ属・アジ科を若干含む。コイ科・ドジョウ科などの淡水魚も検出されているがごく少ない。地点別にみてもこの傾向は大きく変わらず、順位は前後するもののイワシ類・サヨリ属・キス属・ハゼ科が主体種、カレイ科が準主体種となる傾向はいずれの地点でも概ね一致する。

次に、一定量の標本が得られたA-2地点における採取単位・層位別(カット別)の組成を第15図でみると、いずれのカットも地点別の合計でみられた構成種と相違なく、イワシ類・サヨリ属・キス属・ハゼ科が主

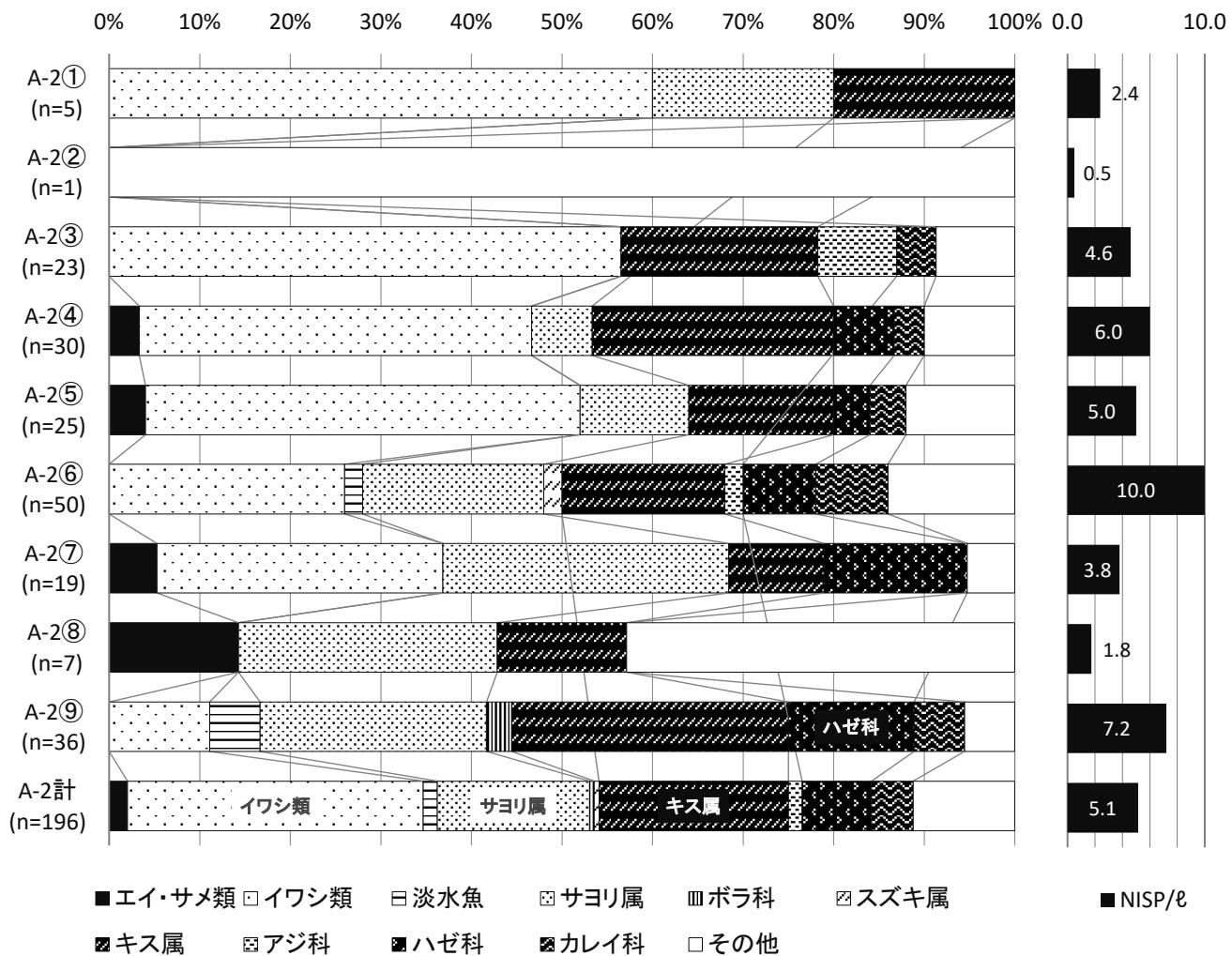
第6表 魚類種名一覧

和名		学名			
軟骨魚綱(板鰓亜綱)		Chondrichthyes (Elasmobranchii)			
メジロザメ目	科・属不明	*	*	Carcharhiniformes fam. et gen. indet.	
アカエイ科	属・種不明	*		Dasyatidae gen. et sp. indet.	
トビエイ科	属・種不明		*	Myliobatidae gen. et sp. indet.	
硬骨魚綱		Osteichthyes			
ニシン科	マイワシ	*		<i>Sardinops melanostictus</i>	
	属・種不明		*	<i>Clupeidae</i> gen. et sp. indet.	
カタクチイワシ科	カタクチイワシ	*	*	<i>Engraulis japonicus</i>	
ウナギ科	ウナギ属	*		<i>Anguilla</i> sp.	
コイ科	属・種不明	*		<i>Cyprinidae</i> gen. et sp. indet.	
ドジョウ科	属・種不明	*		<i>Cobitidae</i> gen. et sp. indet.	
サヨリ科	サヨリ属	*		<i>Hyporhamphus</i> sp.	
ボラ科	属・種不明	*	*	<i>Mugilidae</i> gen. et sp. indet.	
スズキ科	スズキ属	*	*	<i>Lateolabrax</i> sp.	
キス科	キス属	*		<i>Sillago</i> sp.	
アジ科	属・種不明	*	*	<i>Carangidae</i> gen. et sp. indet.	
ニベ科	属・種不明	*		<i>Sciaenidae</i> gen. et sp. indet.	
タイ科	マダイ亜科		*	<i>Pagriinae</i> gen. et sp. indet.	
	クロダイ属	*	*	<i>Acanthopagrus</i> sp.	
サバ科	サバ属	*	*	<i>Scorber</i> sp.	
ハゼ科	属・種不明	*		<i>Gobiidae</i> gen. et sp. indet.	
アイナメ科	アイナメ属		*	<i>Hexagrammos</i> sp.	
コチ科	属・種不明	*	*	<i>Platycephalus</i> gen. et sp. indet.	
ヒラメ科	属・種不明	*		<i>Paralichthyidae</i> gen. et sp. indet.	
カレイ科	イシガレイ	*		<i>Kareius bicoloratus</i>	
	属・種不明		*	<i>Pleuronectidae</i> gen. et sp. indet.	
ウシノシタ亜目	科・属不明	*		<i>Soleoidea</i> fam. et gen. indet.	
フグ科	属・種不明	*		<i>Tetraodontidae</i> gen. et sp. indet.	

*1 R5貝サンプル資料検出、*2 R5現地採集資料検出、*3 S26現地採集資料検出、*4 S26糞石資料検出。



第14図 地点別の魚種組成・魚骨包含密度・メッシュ別検出比(NISP)



第15図 採取単位・層位別の魚種組成・魚骨包含密度(NISP)

体種、カレイ科が準主体種となる。ただし、主体種の順位・割合にはカットによりばらつきがある。すなわち、全体の半数程度をイワシ類が占め、且つ、キス属>サヨリ属となるもの(カット③~⑤)、イワシ類が減少し、その他主体種とともに割合が安定し、とりわけサヨリ属の増加が著しいもの(カット⑥・⑦・⑨)(ただし、カット⑨はキス属の増加も著しい)の2タイプに分類できる。ただし、標本数が僅少であるため、確実性にやや欠けるかもしれない。なお、第15図(右)に示したとおり、カット別の魚骨包含密度も併せて検討したが、組成の変化に調和するような有意な相関性は認められなかった。

現地採集資料 令和5年度調査と昭和26年度調査で採集された2種類の資料がある。合計57点、軟骨魚綱(板鰓類)1分類群、硬骨魚綱10分類群が同定された(第6・7表)。57点中50点が昭和26年度調査の資料であり、カレイ科が25点と最多、これにクロダイ属、エイ目(トビエイ科)、コチ科が次ぐ。カレイ科は比較的大型の個体が主体で、うち17点が椎骨である。これに対し、クロダイ属は前上顎骨・歯骨が多く、タイ科椎骨は検出されていない。なお、昭和26年度調査では、大型のマダイ亜科歯骨左も採集されている。

糞石資料 昭和26年度調査で採集された糞石から検出された資料である。ニシン科腹椎1点、キス属尾椎1点、ごく小型のクロダイ属方骨左1点、サバ属歯骨右・方骨右・舌顎骨右各1点・腹椎3点・尾椎1点、カレイ科前上顎骨右・第1椎骨各1点が同定されたほか、未同定の舌顎骨1点がある(第7表)。

考察 本貝塚で主体となるイワシ類・サヨリ属・キス属・ハゼ科・カレイ科などは、いずれも都川・村田川流域の縄文中期～後期貝塚で多くみられる代表的な内湾性種である。沿岸浅瀬に来遊するこれらの多様な小形魚が混在する点で、本貝塚も当該地域・時期の貝塚群と類似した特徴を示しており、これら貝塚群と同様に、干潟やその周辺の浅瀬を中心とした漁場で、魚種選択制の低い漁法(網漁など)が用いられていたことが推測される(西野1999、樋泉・西野1999)。

同じ都川流域に位置する加曽利貝塚(中期)の魚種組成では、ニシン科が最も多く、これにキス属が次ぎ、カタクチイワシ・サヨリ属・サバ属・ハゼ科・カレイ科なども多い(服部2017)。主な構成種は本貝塚ともきわめて類似しており、小形魚が混在する点でも共通する。しかし仔細についてみると、加曽利貝塚や村田川流域の有吉北・南貝塚では、突出して主体となる魚種(例えばニシン科やハゼ科)があるのに対し、本貝塚ではとりわけ卓越する魚種がなく、主体種・準主体種が偏りなく混在する点で、若干の相違点も指摘できる。詳細な比較検討は今後の課題としたい。なお、これら小形魚に加え、同サンプル中や現地採集資料からはクロダイ属やスズキ属、コチ科、大型のカレイ科など、大形魚も検出されている。これら大形魚も小形魚と同じくもしくは隣接する漁場で副次的に漁獲していたと考えられる。ただし、昭和26年度調査で採集されているマダイ亜科は、本来は外洋沿岸を主な生息域とする魚種であり、少なくとも現在は本貝塚近傍の海域には定棲していない。当該地域・時期の貝塚で普遍的に出土する魚種の一つではあるものの、その入手経路については、搬入の可能性も含めて慎重に検討する必要がある。

(4) 哺乳類・鳥類

令和5年度調査と昭和26年度調査で採集された2種類の資料がある。合計64点(哺乳類61点、鳥類3点)、哺乳類6分類群が同定された(鳥類は未同定)(第7表)。このうちイヌを除く哺乳類のNISP内訳は、イノシシ21点、シカ8点、イノシシもしくはシカ2点、タヌキ10点、テン1点である。イノシシに次いで多いタヌキは、上顎骨左右と下顎骨左および遊離歯と大腿骨左がいずれも昭和26年度調査で検出されている。出土状況の詳細は不明だが、上・下顎骨、遊離歯については、歯種・左右の重複がなく、サイズも揃っているため、同一個体の可能性が高い。この他に埋葬個体と考えられるイヌ1個体(一部)が昭和26年度調査

で採集されている。出土状況の詳細は不明だが、上腕骨左、尺骨右、橈骨左、大腿骨右、踵骨左右が各1点と指骨類12点が一括して保管されていた。このうち橈骨のみ完存、橈骨長(GL)117.67mmを測る。

(5) 人骨

令和5年度調査でA-3地点から人骨3点(脛骨骨幹部、腓骨骨幹部、中手骨もしくは中足骨近位)が出土した。法面の崩落土から採集されたものであり、詳細な出土状況は不明である。(人骨の鑑定は渡辺新氏に依頼した。感謝を申し上げる)

第7表 脊椎動物遺体組成(NISP)

調査年次	R5																	S26										
	地点	A-1				A-2									A-3				A-4			現地採集	現地採集	糞石				
		カット	①	②	③	計	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	計	①	②	③	④	計	①	①	①				
サメ類(ホシザメ型)		1			1										1	1						2	1					
トビエイ科																								5				
アカエイ科															1		1							1				
エイ目									1								1	1						2				
エイ・サメ類		2			2				1							1								3				
マイワシ		1	1		2				1							1		1	1	1	1	1	7					
ニシン科		10	7		17	3			13	12	11	11	6		4	60	1	2	1	1	5	9	3	2	96	1	1	
カタクチイワシ										1	2				3									1	4			
ウナギ属																1	1		2					2				
コイ科											1				2	3								3				
ドジョウ科			1	1																	1			2				
サヨリ属		2	6		8	1			2	3	10	6	2	9	33		1	2	2	5	6		1	53				
ボラ科		1	1	1	3										1	1								5	2			
スズキ属				1	1						1				1		1	1	2	3			8	1				
キス属		5	8		13	1			5	8	4	9	2	1	11	41		1	2	1	4	5	5	1	7	76	1	
アジ科		1	1		2				2			1			3						1		1	7	1			
ニベ科										1					1									1				
マダイ亜科																								1				
クロダイ属												1			1					1			2	5	3	1		
タイ科									1						1	2								2				
サバ属															1	1	2							2	2	7		
ハゼ科		7	12		19				2	1	4	3		5	15	1	1			2	2	2		1	41			
アイナメ属															1										1			
コチ科										1					1	2								4	3			
ヒラメ科																	1	1						1				
イシガレイ																			1					1				
カレイ科		1		1					1	1	1	4		2	9				3	1		1	15		25	2		
ウシノシタ亜目									1						1					1					2			
フグ科										1					1										1			
真骨類(未同定)			2	2					1	1	1	5	1	1		10					1		1	14	1	1		
真骨類(同定不可)		1		1							1	1			2					2					5			
魚類合計		32	39	2	73	5	1	23	30	25	50	19	7	36	196	4	6	8	6	24	28	24	1	16	362	7	50	13
イヌ																										19		
タヌキ																										10		
テン																										1		
イノシシ																										8	13	
シカ																										8		
イノシシ/シカ																										2		
哺乳類合計																										11	50	
鳥類(未同定)																										3		
分析量(ℓ)		5.0	5.0	5.0	15.0	2.1	2.0	5.0	5.0	5.0	5.0	5.0	4.0	5.0	38.1	5.0	5.0	5.0	5.0	20.0	5.0	5.0	5.0	5.0	93.1			
NISP/ℓ		6.4	7.8	0.4	4.9	2.4	0.5	4.6	6.0	5.0	10.0	3.8	1.8	7.2	5.1	0.8	1.2	1.6	1.2	1.2	5.6	4.8	0.2	3.2	3.9			

*第14・15図では分類群を下記のとおり一括して集計した。

〈エイ・サメ類〉: サメ類(ホシザメ型)、アカエイ科、エイ目、エイ・サメ類、〈イワシ類〉: マイワシ、ニシン科、カタクチイワシ、〈淡水魚〉: コイ科、ドジョウ科
〈カレイ科〉: イシガレイ、カレイ科、〈その他〉: ニベ科、クロダイ属、タイ科、サバ属、コチ科、ヒラメ科、ウシノシタ亜目、フグ科、真骨類(未同定)、真骨類(同定不可)

おわりに

月ノ木貝塚の重要性は国指定によって明らかである。周辺の宅地化が進むなかで、台地と林とともに守られてきたことはすばらしい。しかし、70年以上前の概要報告以降、具体的な情報を発信せず、出土資料の公開・活用もほとんど行われてこなかった。当市の誇る5つの国指定貝塚のうち、加曽利貝塚以外は、発掘成果や出土資料の活用がほとんど進んでいない。未指定の貝塚はさらに多くあり、宝の持ち腐れの状況にある。「市の宝」「県の宝」と表現される縄文時代の大型貝塚群を本当の意味で大事な場所とし、次世代につないでいくためには、貝塚をもつ地区的住民や子供たちが誇りに思い、大切に守り育てていく活動が必要である。今回の公表を機会に、この地域にも、加曽利貝塚に負けないようなすばらしい遺跡があり、大事に守られてきたことを住民や子供たちに伝えられるよう努めていきたい。

参考文献

- 小林 崇 2016 「千葉市へたの台貝塚平成8年度調査の報告」貝塚博物館紀要42
- 武田宗久 1951 「千葉県千葉市月ノ木貝塚」『日本考古学年報4』日本考古学協会
- 武田宗久 1953 「原始社会」『千葉市誌』千葉市
- 千葉県教育委員会 2021 『千葉県内縄文時代集落・貝塚詳細分布調査報告書』
- 千葉市教育員会 1974 『千葉市史 原始古代中世編』千葉市
- 千葉市教育員会 1976 『千葉市史 史料編1 原始古代中世』千葉市
- 樋泉岳二 1999 「ハマグリ資源に対する捕獲圧」『貝層の研究 I』千葉市加曽利貝塚博物館
- 樋泉岳二・西野雅人 1999 「縄文後期の都川・村田川流域貝塚群」『研究紀要』19 (財)千葉県文化財センター
- 東京帝国大学 1989 『日本石器時代人民遺物発見地名表』(第1版)
- 西野雅人 1999 「縄文中期の大型貝塚と生産活動—千葉市有吉北貝塚の分析結果—」『研究紀要』19 (財)千葉県文化財センター
- 西野雅人「縄文時代中・後期のヘラ状貝製品(2)」『往復する考古学』近江貝塚研究会
- 西野雅人・菅谷通保・米倉貴之他 2017 『史跡加曽利貝塚総括報告書』千葉市教育委員会
- 西野雅人 2019 「貝塚の貝から社会が見える—都川・村田川流域の中期大型貝塚成立と消滅—」『日本動物考古学会第7回大会プログラム・抄録集』
- 西野雅人 2023 「平成29年度千葉市内主要貝塚資料分析報告」貝塚博物館紀要49
- 服部智至 2017 「魚類(貝サンプル検出資料)」『史跡加曽利貝塚総括報告書(第2分冊)』千葉市教育委員会
- 古内 茂 2000 「月ノ木貝塚」『千葉県の歴史 資料考古1 (旧石器・縄文時代)』千葉県史研究財団
- von den. Dreisch, Angela 1976 A guide to the measurement of animal bones from archaeological sites . Peabody. Bulletin 1 Peabody Museum, Harvard University, Massachusetts.